





阿部昭（あべ・あきら）

一九三四年、広島市に生まれる。

五九年、東京大学文学部仏蘭西文学科を卒業。六二年、『子供部屋』が文学界新人賞に当選。七三年、『千年』が毎日出版文化賞を、七

七年、『人生の一日』が芸術選奨新人賞を受賞する。その他の著書として、『阿部昭全短篇上・下』、『司令の休暇』、『過ぎし楽しい年』、『海からの風』、『父たちの肖像』、『言葉ありき』などがある。

随筆集 みやげの小石

一九八一年一月二五日第一刷印刷
一九八一年一月三〇日第一刷発行

定価一五〇〇円

著者 阿部 昭

発行者 寺田 博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒100 電話〇三二六二九七五三
振替口座（東京）六一二七一八三

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

隨筆集

みやげの小石



阿部昭

作品社

老若男女	9
その一瞬	38
厄年	40
阿川さんの印象	45
子供の世界	49
藤枝さんの調子	54
海浜秋色	58
十四のコラム	63
赤坂界限	85

空　　き　家	88
女性の名前	91
文庫本の贈り物	95
言葉の勉強	97
「自転車」のこと	100
時代おくれ	103
短く書くこと	108
テレビを消して	111
日　　録	116

猫の不幸	123
読書日録	127
三十年前の正月	134
マラソンの友	137
ページを眺める	142
長谷川修を悼む	152
Conversation	157
坂の上の家	162
猫の名著二冊	167

秋から冬へ	174
日記から	180
戦いすんで	196
もう一つの秋	199
みやげの小石	204
ルノワールの女	209
あとがき	231
掲載紙誌一覧	232

装丁 大沢昌助

随筆集

みやげの小石

老若男女

赤ちゃん

おめでとう、赤ちゃん。

こんな時代に無事に目の目を見ただけでも、まずは運の好いお嬢さんだ。無事に生まれてきたって、すぐ捨てられるお友だちもいる。ついこないだも、自分の赤ん坊をつぎつぎと四人まで、産んでは捨て、産んでは捨てていたお母さんのことが新聞に出ていたね。

そうでなくても、駅のコインロッカーの前を通りかかるたびに、一瞬、耳を澄ましたいような気持になる。ひょっとしてまた君たちの仲間が、あの中に隠れているんじゃないかと思っただけ。事実、ちょっと聞き耳を立てたりもするんだ。それから道ばたに放り出して

ある生ゴミ用のポリ容器、あれもなんとなくうさんくさくて、目にするたびにイヤな想像にかられる。君たちはあんなところにまでまぎれ込んでいるんだから、まったく目が離せないよ。

それを思えば、あらためておめでとうを言わずにはいられない。「粗大ゴミ」といっしょにされないで、本当によかった。お母さんにもありがとうを言わなくっちゃ。

しかし、これで安心していいじゃない。これから先が問題だ。見たところ五体満足、衣食も足りて、まるまると元気そうな君たちだが、君たちはあまり長くは生きられないかもしれないぬという、そんな悪い噂もちらはら立っている。零歳ゼロの君たちには、こいつは難問すぎるだろうがね。

この国の若いお母さんたちのお腹なかから出てきた以上、君たちの至純にして無垢なるその小っちゃな肉体も、もうたっぷり地上の有害物質を吸い込んでいるからさ。

皮肉なことに、お母さんたちはお産をするたびに、君たちにその毒をゆずってしまうから、そのつど若返って、寿命ものびる。ところが君たちの寿命のほうは、どんどん縮まって行くんだそうだ。お産は若返りと長生きの秘訣なんだね。そういえば、お母さんがたは君たちを産んでから、急にみずみずしく美しくなったみたいじゃないかね。生まれてくる君たちこそ、いい面の皮だ。

そうして、五十年か百年後には、この国はますます長生きする老人と、短命な子供の墓ばかりになるといふ——そんなミステリーもあるぜ。

いや、どうも、君たちを祝福して迎えるはずが、縁起でもないことばかり並べてしまった。しかしこの地球上で、いま最も虐げられているのは、他の誰でもない、新しく生まれてくる君たちだ。あんまりバラ色づくめのことも言えないじゃないか。

それにしても気にかかる、君たちの頬をぬらす大粒の涙。馬鹿な大人たちは、自分もかつて一度は赤ん坊だったことをきれいに忘れて、君たちの涙の意味に悩まされる。

生まれてくるのが遅すぎたと思っているのか。それとも二十年先の嫁ぐ日のことを、君たちもまたお母さんみたいに、君たちによく似た赤ちゃんを産む日のことを思つて、早くも感傷的になっているのか、などと。

少年

われわれも子供の頃は、かくれんぼなどで十^{とお}ずつ数えるのに一二三四五六七八九十と正確に唱えずに、

「だるまさんがころんだ、だるまさんがころんだ、……」

とやったものである。

今はそうは言わないらしい。

「インデアンのふんどし、インデアンのふんどし、……」

などやっている。

小学生を見ていると、ずいぶん変な遊びがはやっている。「ロクむし」とかいうのがある。敵味方に分かれて、一方の組はゴムまりを持ち、相手方は木の幹などにつかまっている。隙を見て木から離れ別の木へ移ろうとすると、おもいきりボールをぶっつけて「殺す」遊びだ。虫に石ころをぶつけるような具合である。子供のゲームらしい愛嬌がなくて、なんとなく陰湿かつ残忍のおもむきがある。

地面も緑も少なくなり、ろくに昆虫もいないので、友達を虫に見立てて、殺戮を楽しんでいるようにみえる。虫不足であのいやらしいゴキブリなんかも人気があるのだ。つかまえて可愛がっている子もいる。

ゴキブリなにがしというアブラムシ捕りの商品は、アブラムシ退治もさることながら、子供たちのその欲求不満を巧妙に衝いたというべきである。

大体子供が虫と相性がいいのは、連中にしてからが虫みたいなものだからである。「普通二十歳前には」と哲学者パスカル先生も申された、「人は子供である。子供は人間では

ない」。人間じゃないから学校へ行ったり塾に通ったりしているのであろう。それにしても最近はいやに大きな虫がふえてきたようであるが。

小学生ぐらいだと女の子の体位向上が著しいから、男の子は大分押され気味のようだ。ドッジボールをやってもフットベースをやっても、体軀堂々の女の子に圧倒されるので、男の子は氣息奄々えんえんとしている。

「まったく、おれっちの組の女はブスばかりでいやになっちゃうよなア、でぶで、短足で、男みてえに乱暴でよッ……」

なんてこぼしている。
それもおおっぴらに悪口を叩くと、女生徒のグループに物蔭へ連れこまれて「ランチ」されるから、かげでばやいているだけだ。女子は暴力をふるい、男子は言論で対抗するというのが近年の傾向である。十年先二十年先が思いやられる。

せちがらい世の中だから、経済観念だけは発達している。やる気のない若い先生の苦衷を察して、

「まだ月給が安いからなあ……」

と同情もするし、おしやれな女の先生については、

「着るものにずいぶんお金をかけるなあ……」

と心配している。

先生にポーナスが出たときくや、

「いくら出た？　いくら出た？」

とせまる。

虫のくせに油断ならない。

少女

子供たちが見ている。

見る——という姿勢ぐらい子供らしいポーズはない。彼らはただ無心に見る。何にでも見とれる。子供たちの視線がなかったら、この世界はどんなにか索漠たるものになるだろう。人間の社会も、山川草木、鳥獣虫魚の世界も、子供の眼にうつると、みにくさがやわらげられ、ユーモアにかがやき、堪えがたいことも堪えられるものになる。

大人は自分が子供だった頃、どんな目でこの世の中をながめたか、すっかり忘れてしまっている。品物を見ても、もう色や形に心を奪われるより、値打のことが先にくる。人と会っても、相手の喜び悲しみをわがこととして感じるよりも、自分との利害関係しか考え

ない。大人にはもう物を見る暇がない。子供が不幸な人間や傷ついた動物にそそぐ豊かな同情力を、大人はなくしてしまった。「子供じみたこと！」そういつて大人は子供の苦しみを笑に付する。

しかし、子供たちは大人にも劣らない心の悩みを持っている。恋の苦しみさえも。ただそれを大人のようにうまく言葉で言いあらわせないだけだ。としたら、子供の苦しみ方のほうがずっと大きいはずではないか。だから、十歳の子供が自分の顔や容姿に悩んでいるのを、大人は笑う資格はない。肥っている女の子が男の子に「でぶ」とか「ぶた」とか言われるのが辛さに、食べたいおやつを節しても痩せようとする、その気持はもう孤独な愛のきざしである。

十歳ぐらいの少女の顔は、まだ子供々々した仮面をつけているが、それが日一廻と剥がれてきて、下から成熟した「女」の顔が現われてくるような不気味さがある。うわべばかりではない、早くも娘のコケットリーや、母親らしさや、意地の悪い「女」の眼が、のぞく。彼女たちは自分と同じ可愛らしいものが好きだ。ブローチやリボンフラワーに夢中になり、お誕生日のプレゼントに貰ったシャーペンシルで小さな手帖に大事な「ひみつ」を書きこんだりする。かとおもうと、同性の友達を真剣に憎んだり愛したり、絶交したり仲直りしたりする。先生の品評もするし、好きなスターのうわさもする。家に帰れば裁縫